

2019年5月10日

第22回「信用金庫社会貢献賞」の受賞活動決まる！

— 「特別支援学校との交流・協働」 —

奈良中央信用金庫（奈良県）が会長賞に

一般社団法人全国信用金庫協会

全国信用金庫協会（会長：佐藤 浩二）が実施している、信用金庫業界の顕彰制度第22回「信用金庫社会貢献賞」の受賞信用金庫、個人賞受賞者がこのほど決定いたしましたので、お知らせします。

第22回「信用金庫社会貢献賞」受賞活動

賞の種類	信用金庫名（都道府県）	受賞活動名
会長賞	奈良中央信用金庫（奈良県）	特別支援学校との交流・協働
Face to Face 賞	東濃信用金庫（岐阜県）	地域の人材育成と文化発信への取り組み
	遠賀信用金庫（福岡県）	「絵本 de えがおプロジェクト」の推進
	富山県信用金庫協会（富山県）	富山県の観光・産業振興への取り組み
個人賞	しののめ信用金庫（群馬県） みやざわ さとし 宮澤 哲史 氏	郷土の伝統芸能「 <small>じんだししまい</small> 神田獅子舞」を継承
	世田谷信用金庫（東京都） 世田谷信用金庫落語研究会	落語口演を通じた社会貢献活動
	愛知信用金庫（愛知県） きのの けんじ 木野 健二 氏	バルーンアートで地域のみんなを笑顔に
地域活性化しんきん 運動・優秀賞	神戸信用金庫（兵庫県）	ラジオ関西と連携した地域情報の発信
	観音寺信用金庫（香川県）	地元企業の生産性向上への支援

本賞は、地域に生まれ、地域と共に歩む信用金庫が、様々な分野で地域貢献・社会貢献活動を実践している真摯な姿を多くの方々に知っていただくとともに、地域における存在価値を一層高めていくことを目的に、1997年に創設いたしました。このような、地域に根ざした永年にわたる信用金庫の地道な活動に光を当て、これを顕彰することは大きな意義があると考えております。

今回は、昨年10月から12月までの募集期間に、168信用金庫・4関係団体から568件の応募がありました。その活動内容は多岐にわたっており、環境保全や社会福祉、金融教育支援、高齢化社会への対応のほか、東日本大震災からの復興支援、地域活性化への取り組み、次世代経営者の育成、取引先の販路拡大策など、どれも地域に根ざした信用金庫の不断の努力と叡智を結集したものとなっています。選考委員会での厳正な審査の結果、会長賞をはじめとする受賞6信用金庫、個人賞受賞3名の活動が決定いたしました。なお、来る6月19日（水）開催の第144回全信協通常総会において表彰式を執り行う予定です。

 <参考> 第22回「信用金庫社会貢献賞」応募状況

地区別応募状況

地区名	金庫・団体数	応募件数
北海道	11	35
東北	14	35
関東	37	87
東京	13	54
北陸	10	18
東海	28	136
近畿	23	96
中国	12	47
四国	5	7
九州北部	6	17
南九州	9	30
団体	4	6
合計	172	568

活動分野別応募状況

活動分野	応募件数
地域社会活動	365
スポーツ	48
社会福祉	29
芸術・文化	22
教育	42
環境	41
健康・医学	3
国際交流	0
史跡・伝統文化保存	7
災害救援	11
学術	0
合計	568

本件についてのお問合せは、全国信用金庫協会 広報部 小曾根、今林、坂本(真)、袴田 (TEL.03-3517-5722 FAX.03-3517-5792)までお願いいたします。

第22回「信用金庫社会貢献賞」の選考総評と受賞活動の概要

1. 選考総評 地道に続ける貢献活動の横展開が信用金庫のネットワーク補強に

選考委員 村本 孜氏（成城大学 名誉教授）

信用金庫社会貢献賞は、業界に定着した感が強い。一昨年から審査委員に復帰したが、最初の審査に関わった頃に比べて、応募数も激増し、その内容・質も相当レベルアップしている印象がある。それにしても、各々の信用金庫は地道に、また永きにわたって社会・地域にさまざまな形で貢献していることが分かる。非営利・相互扶助という信用金庫のアイデンティティが発揮され、地域と伴走している様子が伝わってくる事例が多い。

ある理事長は、自らの信用金庫の使命を「強くてやさしい信用金庫」とし、「強く」とは財務の健全性を保ち、その価値を地域に還元していくこと、そして「やさしさ」の一つを社会貢献活動とし、その具体例として信用金庫社会貢献賞を挙げている。その金庫はこれまでに、Face to Face賞、会長賞を受賞し、社会貢献の実を示しているほか、「やさしさ」の特徴的な取り組みとして、ボランティアサークルの取り組み（いろいろな施設の掃除、草取り、プールの清掃などのボランティア活動）を挙げている。

この理事長の言葉にあるように、信用金庫にとって、社会貢献賞は、社会貢献・地域貢献の見直し・自らの気付きとなり、大きな励みになっている。全国信用金庫協会は1980年代末から長期ビジョン研究会を随時設置し、10年後・20年後の業界のあるべき姿を示す努力をしてきたが、その最初の報告で示された数個の提言の一つが社会貢献賞の創設であった。営利機関の金融機関とは一線を画した協同組織のアイデンティティを確認できる諸活動を、業界として顕彰しようという位置付けであった。金庫経営に直結しなくても、非営利・相互扶助を、体現する活動が信用金庫には数多くある。陽は当たらなくとも、地道に地域社会に貢献している姿に光を当てたいというのが、長期ビジョン作成に関わった者の想いであった。

その意味で、259の信用金庫には、まだまだ隠れた社会貢献活動があると思われる。毎年、500件以上の応募があるが、個々の信用金庫におかれては、今一度、自己点検をされ、隠れているかもしれない活動の発掘をされることが期待される。

社会貢献活動に定型的な、一律のものがある訳ではなかろう。模範的な活動はいうまでもなく、地域性のある活動、ユニークな活動、些細と思われる活動でも、全金庫で横展開することで、日本全体での大きな潮流になる可能性があり、積極的に応募されることが期待される。

毎回、審査で悩ましいのは、信用金庫の本業に関わる活動をいかに評価するかである。ビジネスマッチング、会員制度活性化（若手経営者育成など）、新たな融資（複数金庫のコラボなど）等々である。個人的には、本業に関わる活動であっても、新規性・継続性があり、信用金庫らしい活動であれば十分評価されるべきものと思料する。

審査は協会の担当部署職員・上席職員・役員などによる予備的審査のうえ、9名の選考委員が事前審査を行い、一堂に会した選考委員会で慎重な審査を行う。毎回、各委員がそれぞれの見解を開陳し、収斂するまで行うため、長時間となる。今年も熱い議論の末、ようやく収斂した賞もある。それだけ受賞した活動と、惜しくも選外になった活動とには差がなかったということであろう。選外の活動におかれては、来年度も応募することが期待される。特に、個人賞は何十年も関わっている活動が多くあり、甲乙付け難く選考に窮する例が多いからである。

地域経済・地域金融を取り巻く環境は、厳しさを増している。地域創生は地域金融機関とりわけ信用金庫の地域隅々にわたる諸活動がその支えであり、そのネットワークは地域銀行にはない特色である。社会貢献賞の諸活動の横展開は、ネットワークの補強につながるものなので、本賞の一層の発展を祈念したい。

2. 受賞活動の概要

【会長賞】

奈良中央信用金庫（奈良県）／特別支援学校との交流・協働

奈良中央信用金庫は1992年から、さまざまな交流を通じて、障がいのある方たちの社会参加や社会復帰の場を提供している。これは同金庫が奈良市の障害者支援施設が主催する音楽コンサートに協賛したのを機に、同施設の入居型福祉ホームの建設費用を支援しようと、チャリティーコンサートを主催したことに始まる。

この交流をきっかけに、1996年には障がい者アートを金庫で使う札状用ハガキのデザインに採用。定期積金の成約粗品や金庫の周年記念グッズなど、顧客サービス品にも用いるようになったが、さらに金庫役職員の理解をより深め、障がい者の社会参加の機会提供に一層資するため、2012年、県内にある3つの特別支援学校(高等養護学校、明日香養護学校、西和養護学校)との交流・協働を本格的にスタートさせた。

以来、本店ロビーで開催する養護学校生の作品によるアート展は、毎年恒例に。当初、民間のスペースを利用したこのような展示は奈良県内初の試みだった。そのほか、地域の清掃をするクリーンキャンペーン、異業種交流組織「ならちゅうしん経営研究会」総会の受付業務など、養護学校生と職員の交流・協働の場をつくっている。生徒たちは、社会との接点が増えたことで自信につながり、学校でも活発になるなど変化をみせている。また、アート展の出展者からは、新たな創作意欲が湧いているとの声も聞かれる。

一方、金庫役職員にとっては、これらの機会を通じて障がいに対する誤った先入観が払拭され、障がい者雇用における庫内風土の醸成にもつながっている。

【Face to Face 賞】

東濃信用金庫（岐阜県）／地域の人材育成と文化発信への取り組み

東濃信用金庫は、地域活性化に必要なものは「人材と文化」と考え、地域に開かれた人材育成と、美濃陶芸文化発信の拠点として、2015年5月、研修施設「とうしん学びの丘“エール”」をオープンした。公募で選ばれた名前には、学ぶ姿勢と地域を応援する意味が込められている。金庫内部の研修だけでなく、若手企業人の経営力強化や創業支援、将来を担う子どもたちへの金融教育や郷土教育など、将来を見据えた人材育成のため、地元の方々に利用されている。

講義棟には300名ほど収容できるホールが、研修棟には10～20名程度のセミナー等に相応しい多目的室が3部屋あり、屋外には、スポーツ大会、レクリエーションなどに使える全面人工芝の多目的広場を備えている。営利目的でなければ誰でも自由に借りることができ、これまでに延べ606団体・企業、およそ3万4千人が利用（2019年3月）。多様なセミナー、講演会、交流会、チャリティーコンサート等々を開催してきた。

展示棟には「とうしん美濃陶芸美術館」があり、同金庫が保有する美濃焼コレクションが展示されているほか、美濃陶芸文化を広く伝えるための企画展を随時行っている。常駐する学芸員の案内サービスがありながら入館無料で、オープンから延べ2万9千人あまりが来館している（2019年3月）。

2016年3月、景観や機能に優れた構造物に多治見商工会議所が贈る「第22回多治見ハーモニー大賞」を受賞。美術館は同年11月、岐阜県の「まちかど美術館・博物館」に登録され知事から感謝状を授与されるなど、県内における地域文化・交流産業の発信拠点となっている。

【Face to Face 賞】

遠賀信用金庫（福岡県）／「絵本 de えがおプロジェクト」の推進

本プロジェクトは、東日本大震災で被災した子どもたちを笑顔にするため絵本を届ける取り組みで、2011年から始められ、今年で8年目を迎えた。届ける絵本は、地元の絵本作家で同金庫のイメージキャラクター「黒猫のメチャくん」の制作者・さかいみるさんが毎年書き下ろしたものだ。1作目の『きみのこと とってもすきさ』に始まり、今年の『おちやのじかん』で8作目になる。

プロジェクトの発端は、さかいさん夫妻が東日本大震災の直後、これまでの作品を再編集した絵本1万冊を仙台市等に送ったことにある。同金庫はこれに協賛。以来、制作の資金集めを金庫主催のイベント等で広く呼びかけ、賛同者を募ってきた。支援の輪は回を重ねるごとに全国に広がり、この7年間で累計11万8500冊の絵本が東北の子どもたちに届けられた。

2013年からは東北の信用金庫と連携し、東北の8金庫から被災地の子どもたちに直接絵本を届けるという取り組みを開始。信用金庫の役職員から保育園、託児所等の子どもたちに絵本が手渡される様子はマスコミでも報道され、話題となった。まさに信用金庫の「つなぐ力」発揮によって、地元作家の想いが被災地の子どもたちに直接届けられた。

また、2015年からはネパール大地震で被災した子どもたちへ、ネパール語に翻訳した絵本を届ける活動も始まったほか、平成28年熊本地震を受け、熊本・大分にも絵本が送られた。各地より届く礼状からは、絵本が子どもたちのPTSD（心的外傷後ストレス障害）の緩和に役立っていることが伺われ、今後も継続した支援で心の復興に寄与していくと、遠賀信用金庫の決意は固い。

【Face to Face 賞】

富山県信用金庫協会（富山県）／富山県の観光・産業振興への取り組み

北陸新幹線の開業に先駆け、2013年9月、富山県内全信用金庫、富山県、信金中央金庫の3者は、①県内への観光誘致、②企業誘致、③生産品販路拡大一などを目指し、「観光・産業振興に関する協定」を締結した。これらの目的を達成するため、富山県信用金庫協会は、オリジナルPR冊子『ふるさと自慢・北陸富山』（1～4号）を制作し全信用金庫の約7400店舗へ配布、また県内各金庫理事長が持つPR用の共通名刺を2種類作成して関係者に配布するなど、地元の魅力を県内外に積極的に発信している。

さらに、全国にある信用金庫の年金旅行などで富山に来県されるお客さまに最高のおもてなしを表そうと、県内7金庫（富山・高岡・新湊・にいかわ・氷見伏木・砺波・石動）は誘客への連携を強化。役職員用に作成された応対マニュアルに沿って、来訪地区の金庫職員が歓迎の横断幕を掲げ、地元観光マップなどを配布しながらお客さまを手厚く出迎える。また、営業店窓口担当者を対象に、外部講師による勉強会を実施し、おもてなし意識の醸成にも注力している。

ご当地PR用に制作した「観光名刺」は、2014年2月、「信用金庫PRコンクール」（全国信栄懇話会）のパンフレット・冊子部門で優秀賞を、2016年6月には、「平成28年度観光事業振興功労者表彰」（公益社団法人富山県観光連盟）を受賞した。

こうした活動が奏功して信金の顧客から県内旅行に誘致した人数は増え続け、2013年度以降5万人近くに及び、業界全体のイメージアップと県内の観光・産業振興に寄与している。

【地域活性化しんきん運動・優秀賞】

神戸信用金庫（兵庫県）／ラジオ関西と連携した地域情報の発信

阪神・淡路大震災の発生から20年という節目の2015年、震災の継承と発信を通じて地域経済の活性化と再興に貢献したいと考え、ラジオ関西と連携。新番組「こうべしんきん 三上公也の企業訪問」を制作した。これは、神戸信用金庫が三上アナウンサーと共に兵庫・神戸で活躍する取引先を訪ね、企業理念や歴史、震災を乗り越えたエピソードなどを紹介していく番組だ。毎週火曜日の朝の10分間に1、2社ずつを紹介している。

翌年度からは、地元コミュニティ等の取り組みにもスポットを当て、企業訪問と併せて金庫営業エリア内のさまざまな情報を広く発信するようになった。これまでに全208回、延べ254社（団体）を紹介してきた（2019年3月）。出演した企業には、リスナーからの問い合わせやサービスの予約が増えるなどの効果もあり、社内の活性化にも役立っていると喜ばれている。

また、番組のスペシャルイベントとして、「企業見学バスツアー」も開催している。これは一般リスナーと同金庫の連携先である神戸高専学生を招待し、高い技術力と熱意を持った「ものづくり企業」の現場を見ていただくというもの。ものづくりの面白さや大切さが肌で感じられると好評で、4年連続で開催された。2017年からは、「医療産業都市・神戸」を拠点とする信用金庫として、兵庫県立粒子線医療センターや神戸低侵襲がん医療センターなどの先進医療を応援する役割を意識して情報発信を心がける。

地域に根差した営業店だからこそ拾える地域密着の話題はリスナーに親しまれており、同金庫は地域活性化に寄与する確かな手応えを感じている。

【地域活性化しんきん運動・優秀賞】

観音寺信用金庫（香川県）／地元企業の生産性向上への支援

地域の活力のためには、地域の企業が元気でなければならない。同金庫は、地元の中小企業をサポートするため、2012年6月、「中小企業支援ネットワークの強化事業」を活用し、各種専門家とのネットワークの形成を推進した。同年11月には「経営革新等認定支援機関」の認定を取得し、お客さまの課題に向き合う支援体制を強化。地元の商工会・商工会議所との連携を強めたほか、中小企業基盤整備機構等々の公的支援機関による支援事業を活用し、事例を一つひとつ積み上げていった。こうして専門家派遣件数は毎期100先を超え、2019年3月31日時点では既に150件となった。

2013年2月には、四国経済産業局の担当官を招聘し、「ものづくり補助金・創業補助金」説明会を開催。その後、計4回を開催し、累計参加者数は約340人になった。さらに、ものづくり補助金の申請書作成の支援を始めると、申請件数はもとより採択件数も劇的に増加。現在までの採択案件は累計で130件、金額にして11.7億円の獲得を支援、28.7億円の設備投資を喚起した。

こうした結果、地元企業の付加価値額が向上。当金庫は円滑な事業承継に寄与しているほか、多くの雇用も生み出している。直近では、平成29年度補正の1次公募において、金庫職員が支援を行い、52件申請中37件採択（採択率71.15%）と過去最高の採択率を得た。同2次公募では14件の採択を獲得したが、これは地銀含む四国の「経営革新等認定支援機関」中、No.1の採択数という誇れる実績となった。この数字は、地元中小企業の本業強化と生産性向上への観音寺信用金庫による高い貢献度を物語っている。

【個人賞】

しのめ信用金庫（群馬県）宮澤 哲史氏 / 郷土の伝統芸能「^{じんだししまい}神田獅子舞」を継承

群馬県藤岡市神田に伝わる獅子舞。その躍動感ある舞いを幼い頃に見て魅了され、8歳の時には子どもの踊り“カンカチ”を初体験した宮澤氏。その際、「250年続く伝統を絶やすわけにはいかない」と長老から聞いた言葉が印象に残り、子どもながらに「これは大変なことだ。続けなくては」と心に決めた。以来、62年にわたり獅子舞を守り続ける。

富士浅間神社の春祭りや、藤岡市郷土芸能鑑賞会に出場して舞いを披露するほか、地元小学校の「郷土学習」では講師を務め、獅子舞の歴史を伝えつつ太鼓や笛の体験授業をしている。2001年、群馬県神社庁長より感謝状を授与。2009年から神田獅子舞保存会の会長となり、70歳の現在も後進の指導に当たる。県内の保存会も年々減っていくなか、地域の宝・郷土芸能を若い世代にも伝承してほしいと、切に願っている。

【個人賞】

世田谷信用金庫（東京都）世田谷信用金庫落語研究会 / 落語口演を通じた社会貢献活動

大学の落語研究会出身の役員を指導顧問に有志により2009年12月、「せたが家90落語会」が発足。これは2011年4月の同金庫創立90周年に向け、クラブ活動の活性化が企図されたことが追い風となって生まれたものだが、企業内“オチケン”は金融業界のみならず他業界でも珍しい。公演は顧客向け定例落語会を中心に、年間12回程度行っており、うち2回は300人収容のホールを埋めるほどの腕前。ステージは漫才やマジックを交えた寄席形式で行われることが多く、演者はゲスト以外金庫役職員だ。現在、11名で活動する。

地元での評判は高く、根強いファンも多い。敬老会、自治体、病院などが主催するイベントにも引っ張りだこだ。笑いは万病に効くといわれる。落語で学んだ「間のとり方」は金庫の営業でも生かされており、仕事との両立を図りながら、これからも“笑いの出前”を続けていく。

【個人賞】

愛知信用金庫（愛知県）木野 健二氏 / バルーンアートで地域のみんなを笑顔に

独学でバルーンアートを習得した木野氏。その動機は、勤務する支店の前を毎朝通る保育園児たちを「喜ばせたい」と思ったことだった。そして2013年のクリスマスにバルーンをプレゼントしたことがきっかけとなり、金庫支店の装飾にその技を生かすなど、活躍の場を広げていった。

転勤を機に毎日、あま市役所を訪問するようになったとき、収納窓口をバルーンで飾ることを提案して実現。季節に応じて変わる装飾に、「窓口が明るくなった」と市民の方の評判を呼んだことから、市の子育て事業や高齢者福祉事業からの依頼でバルーン教室を開くようにもなった。名古屋市内に転勤後も各区行政から声がかかり、コミュニティセンターの祭りやマルシェ、店舗のオープニングイベント等にも協力する。こうして地域のさまざまな場所に木野氏が添えたバルーンアートの花が咲き、笑顔の輪が広がっている。

以 上

< 参 考 > **第 2 2 回「信用金庫社会貢献賞」について**

【創設目的】 地域に生まれ、地域とともに歩む信用金庫の原点を踏まえ、地域の発展に貢献する信用金庫の真摯な姿を広くアピールし、お客様や地域の信頼を揺るぎないものとするとともに、地域での存在感を一段と高めていく。

【対象活動】 信用金庫にふさわしい地域に根ざした活動で、地域振興、社会福祉、芸術・文化支援、史跡・伝統文化保存、交通安全、教育支援、留学生・在日外国人支援、環境保全、各種ボランティア等の地域社会活動および災害救援活動等の分野とする。

【表彰対象】 ・信用金庫および信用金庫役職員（個人・グループ）
・地区・府県信用金庫協会、中央団体

【選考基準】 活動の継続性（3年以上継続された活動であること。ただし、Face to Face賞の応募活動のうち、その特性から活動期間が必ずしも長期に亘らないもの、地域活性化しんきん運動・優秀賞は除く）、活動目的の社会的意義、地域との一体性（地域に溶け込んだ地域の方々と一体となった取組み）、活動の困難度、援助を受ける側の評価・感謝の度合い、関係者または地域社会に与えた影響、活動内容・方法のユニークさ、などを総合的に判断する。

【応募期間】 2018年10月1日から12月30日まで

【選考委員】 ※所属等は2019年3月現在、敬称略

石田	徹	日本商工会議所 専務理事
島田	京子	元 公益財団法人 横浜市芸術文化振興財団 専務理事
高橋	陽子	公益社団法人 日本フィランソロピー協会 理事長
野坂	雅一	総務省 地方財政審議会 委員
堀田	力	公益財団法人 さわやか福祉財団 会長
村本	孜	成城大学 名誉教授
佐藤	浩二	一般社団法人全国信用金庫協会 会長
日沖	肇	信金中央金庫 副理事長
増田	寿幸	一般社団法人全国信用金庫協会 広報委員会 委員長

【各賞の内容】

会 長 賞・・・活動の社会的意義、地域との一体感、地域社会に与えた影響等を総合的に判断し、Face to Face賞、地域活性化しんきん運動・優秀賞の受賞候補活動の中から最も優れた活動に対し与えるものとする。

Face to Face 賞・・・地域金融機関にふさわしい、地域社会に溶け込んだ、地域の方々との一体感を深めることに寄与した活動および地域金融機関の社会貢献活動として今後の取組みが期待され、奨励される活動、ならびにその特性から活動期間が必ずしも長期に亘らないものであっても、環境・社会問題への取組み、災害復旧支援など関係者や地域社会に大きく貢献した活動等に対して与えるものとする。

地域活性化しんきん運動・優秀賞・・・中小企業のライフサイクルや経営課題等に応じた支援や地域経済の面的な活性化をめざす活動のうち、各々の地域社会の実情と信用金庫の特性に合わせたユニークで、他の範となる活動に対して与えるものとする。

個 人 賞・・・個人あるいはグループの取組みで、信用金庫職員として他の範となる活動に対して与えるものとする。